

## 結縁灌頂の庶民化(二)

— 近世における結縁灌頂 —

### 上 田 靈 城

智積院第六世有貞僧正伝によると、師は越州長岡玉蔵院で始めて灌頂壇を立ててより、正保三年には江戸中野の宝仙寺で、慶安三年には江戸の円福寺で開壇したと記されているが、これが庶民に解放された結縁灌頂であつたかどうか不明である。この宥貞に師事した人に城州五智山沙門乗円と城州

稻荷山沙門日雄があり、乗円(一六七三没)は「披<sub>三</sub>五智山荒榛<sub>一</sub>為<sub>三</sub>興祖<sub>一</sub>建<sub>三</sub>灌頂壇<sub>一</sub>徧化<sub>三</sub>四部<sub>一</sub>……」と云われ、日雄(一六七四没)は「寛文中遷<sub>三</sub>神照寺<sub>一</sub>開<sub>三</sub>灌頂壇<sub>一</sub>大度<sub>三</sub>緇素<sub>一</sub>」と云われているが、徧化四部、大度緇素のような灌頂は結縁であつたと思われる。豊山の亮汰も「寛文己酉春住<sub>三</sub>江州総持寺<sub>一</sub>建<sub>三</sub>灌頂壇<sub>一</sub>徧利<sub>三</sub>道俗<sub>一</sub>」と記されているから結縁灌頂を行つたと考えてよからう。

又、京都観音寺沙門宏源(一六八二没)については「緇素受<sub>三</sub>灌頂及一印一明者不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>其数<sub>一</sub>」と続日本高僧伝は伝えられている。このように中央の権門を離れた地方寺院に於て庶民

の道俗を対象に結縁灌頂を行う例が、十七世紀中頃から散見されるが、このような風潮の中で、浄厳・蓮体による結縁灌頂の庶民化が進められたものと思われる。

蓮体作の「浄厳大和尚行状記」の内容の大半は授戒灌頂講經の記録で占められており、その意味では、蓮体が自身の授戒灌頂等を記録した「授印可灌頂等記録」と同質のものである。今、行状記の記録によると、延宝四年(一六七六)河内常楽寺で結縁灌頂を始行して以来、元禄十五年(一七〇二)で没するまでの二十六年間に十七回開壇され、その道場は、河内常楽寺二、河内延命寺二、河内教興寺一、播州国分寺一、讃岐聴徳庵一、讃岐正覚院一、淡路慈眼寺一、備後西国寺一、江戸放生寺一、江戸靈雲寺五、上州大染寺一となつている。受者の総計を蓮体は三万四千五百五十五人と録している。受者一万四千人というような表現があるので概算しかできないが、行状記を集計すると二十六万四千余となり、光

道作の「浄厳大和尚年譜草稿」の記録を集計しても二十万余人の受者を算えることになる。この数字を信用するとすれば従来の結縁灌頂の受者数に比して飛躍的に多く、俗士女の間に広く結縁灌頂の儀式が受容されたと見ることが出来る。元禄六年靈雲寺で行われた灌頂には、受者三万九千六百二十三人を数えた。従つて三日、七日、十日の間連日連夜入壇させたとようであり、蓮体の場合には七日間修行の記録がある。古来の結縁は、初夜から後夜にかけ一夜限り受者を入壇させることに定まつていた。浄厳蓮体の連日修行の方式は古式を破つたものであり、後に真源の難ずる所となつたが、多数の庶民に解放せんとする浄厳の姿勢の表れである。

河内地蔵寺に保存されている「授印可灌頂等記録二冊」は元禄十年より正徳五年に至る蓮体自筆の記録で元禄十年以前は欠本になつている。「地蔵寺雜録一冊」はその続編で享保元年より同十年（蓮体没前年）に至る自筆記録である。この二資料によると、元禄十年から享保十年に至る二十八年間に八回の結縁灌頂が行われ、受者合計六万二千三百九十五人を計へることが出来る。その道場は明石密蔵院一、河内教興寺一、河内延命寺二、河内地蔵寺一、摂州生玉真蔵院一、信貴山遍照院一、岡山法輪寺一である。元禄九年春岡山にて結縁灌頂を行じ、入壇者一万三千余人あつたことを、蓮体は自作の「続鉾石集巻上」の中で述べているから、生涯の回数は今少し増

えるかも知れない。

元禄十年、浄厳は江戸近国の庶民の要請によつて靈雲寺に灌頂講を結び十五万余人の講衆を集めて隔年に灌頂を修することを恆規とした。社衆の長には浅草長嶋屋入交長左衛門を始め十二人の姓名が挙げられているが恐らく富商富農である。十二年には七間に九間の灌頂殿が靈雲寺に建立されている。天保三年（一八三二）開版の「江戸名所図会」巻の五には靈雲寺の見取図を出しているが、その中央に「灌頂堂」があり「隔年灌頂を行ふこと今に至てたえず」と記されている。

結衆や講といわれる組織は鎌倉時代から発達し室町時代には広く庶民化して村落の年中行事や法要などにそれぞれの役割を果たし、江戸時代には更に発達して社寺への参詣をリクリエーション化したと云われる。講は仏教行事の庶民化を促進したのである。靈雲寺に灌頂講が組織されたのは結縁灌頂の儀式を庶民化する上に画期的なことであつたと思われる。

浄厳は何故このように結縁灌頂の庶民化に力点を置いたか。次のように考えられる。浄厳は、大日経疏の主旨を阿字本不生であると読み取り、「密教ハ左ニモ右ニモ阿字本不生ヲ本旨トスル」（弁惑指南）故に「密教一貫の道は阿字本不生に通達すること」（光明真言観誦要門）であると考える。阿字は真言陀羅尼の本源であるから、阿字本不生に通達するためには真言陀羅尼を重視する立場となり、真言陀羅尼の経軌に基す

いた正しい読み方、字義、句義に通ずることが密教の本旨に通達するための不可欠要件ということになる。悉曇三密鈔、吽字義旋陀羅尼門釈 光明真言觀誦要門という一連の著作はこの立場の表われである。従つて宗学の宣揚を生涯の使命とした浄厳が真言陀羅尼の普及を計つたのは論理的な結果であつた。高野山を下山して最初の著述が「諸尊種子真言集」(寛文十一刊)であり、以後普通真言藏、大随求陀羅尼經、仏說大愛陀羅尼經、瑜伽課誦等の編著を刊行している。何れも真言陀羅尼を梵書しそれに音写漢字をつけ、片仮名を付し、時に句義を割註した。諸尊法の次第、口訣要鈔等三百余巻の東密事相關係の撰述が浄厳によつてなされているが、その中に用いられている真言陀羅尼の梵字にも音写漢字と片仮名を付し字義句義を割註して梵文の意味の理解を助けている。真言不訳、語義不知の相承が生きていた時代に「若纔解<sub>レ</sub>其義<sub>レ</sub>則或信決定<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>義則或有<sub>二</sub>疑而不<sub>レ</sub>決之者<sub>一</sub>故翻<sub>レ</sub>之亦宜」(妙經新註冠註)と述べて学究的合理的な態度を示した。しかし陀羅尼の字義句義に通ずるのは出家でも困難である。そこで在家庶民には真言陀羅尼の読誦書写が勧められ、梵書を護符として身につけることによつて罪障消滅未來成仏除災招福の功德のあることが強調された。右の一連の陀羅尼開板に多くの俗士女が助縁したのはこの為である。

浄厳は真言陀羅尼を受持する前提条件として、出家は受明

灌頂、在家は結縁灌頂を受けることが必須であると考へていた。「若欲<sub>三</sub>持<sub>二</sub>誦斯等真言<sub>一</sub>之者必先詣<sub>二</sub>阿闍梨所<sub>一</sub>入<sub>二</sub>漫茶羅<sub>一</sub>然後宜<sub>三</sub>須受持<sub>二</sub>一切忌勿<sub>レ</sub>愆<sub>二</sub>法則<sub>一</sub>」(普通真言藏)という様な文は随処に見られる。先受灌頂―真言受持という思想は大日經疏、薤呬耶經、略出念誦經に典拠がある。真言密教への初入門は、出家にあつては受明灌頂、在家にあつては結縁灌頂を受けることというのが、儀軌の説に基づく浄厳の学究的合理的な要請であつた。

このような合理的な要請だけでは一回に何千何万もの庶民を結縁灌頂壇に動員することは不可能な筈である。より庶民の嗜好に適した弘通が必要となり、浄厳を助けてそれをなしたのが蓮体であつた。貞享五年蓮体は「誘辺鄙之俗素、導深閨之婦女」ために「真言開庫集」を撰したが、先受灌頂―真言受持という師説を忠実に継承しながらも「第八結縁灌頂功德勝利之事」という一項を加えた点に異なつた方向を示す。即ち、大日經、大疏、教王經、五秘密儀軌、撰真実經の文を証として「一度曼茶羅ヲ拝見スル功德スラ猶無量無辺ナリ況ヤ結縁灌頂ノ功德ヲヤ」と述べ結縁には三惡趣遠離、罪障消滅、除災与樂、速疾成仏の功德ありと説き「在家ノ人ハ若シ結縁灌頂アリトキカバ設ヒ百里ニ百里隔タルトモ尋ネ行テ入壇スベキ者ナリ」と勧説している。

灌頂の得益については既に早く「シンジャ要秘鈔第六」に

説かれ蓮体が列挙した文証の大半は既にこゝに引用されているが、本書は已達の阿闍梨を対象にした撰述であり、灌頂の得益であつて特に結縁灌頂には言及していない。結縁灌頂の功德と明言して在俗を対象に勧説したのは恐らく蓮体が始めと思われる。

更に開庫集には結縁灌頂に関する因縁説話を挙げる。伊予国の某病死して墮地獄し淨厳和尚建立の結縁灌頂に入壇していた功德によつて蘇生し寿命増長した説話等四話。この内淨厳に関する三話は、そのまゝ行状記天和三年の条に再録されている。行状記元禄八年の条には更に三話が追加される。肉食飲酒して入壇した某僧の話。入壇の志を果たさず急死した武士に代つて朋友が名代として入壇した功德により急死の武士が成仏できた話。入壇の志を果たさず死去した者がその子の夢枕に立つて名代入壇を依頼せし話。ここで蓮体は名代入壇の功德によつて死者が往生できることを説いた。我々は既に中世における結縁灌頂が貴人の追善儀礼として行われていたのを見たが、ここではその庶民化の意図をみる事ができる。観音薬師地藏などの靈驗譚、陀羅尼の功德を語る説話は今昔物語や沙石集などの説話文学に豊富であるが、結縁灌頂に関する説話を語つたのは本朝に於ては蓮体が始めではなからうか。

蓮体は又、「灌頂ノ印信 随求 大仏頂陀羅尼等ハ平生守護

ニ挂テ入棺ノ時モ棺中ニ納ムヘキナリ(中略)且又金剛線ハ亡人ノ左臂ニ掛シメ齒木等ハ懷中セシムベシ」(統鑑石集)と説く。陀羅尼や土砂を守護として身につけ死後は亡者の身につける功德を説いた元亨釈書や土砂勸信記の説にならつて、印信金剛線齒木など灌頂時に授かる品物が亡者得脱に功德あることを強調する。結縁灌頂は葬送の儀礼と結ぶことによつて一層庶民の生活化されたものと思われる。仏教儀礼は庶民に受容される場合には呪術化宗教化されてその広がりを持つてきた。結縁灌頂の儀式も又、近世に至つてこの道を進んだと云える。

淨厳蓮体の影響によつて結縁灌頂は地方寺院で盛行したと思われる。延宝七年木食以空は河内天野山にて十日間に一万五千二百十五人を入壇させた。曇寂は正徳五年福山明王院で一万三千五十余人を入壇させた。文化十四年浪速天満の宝珠院では五日間に受者五千人を数えた。高野山成蓮院真源が「頃日於<sub>二</sub>辺土<sub>一</sub>伝法之次漫引<sub>二</sub>結縁衆<sub>一</sub>或<sub>二</sub>二日三日遂及<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>非法之至不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>挙言<sub>一</sub>又或有<sub>下</sub>修<sub>二</sub>他門持明灌頂<sub>一</sub>之次引<sub>二</sub>結縁衆<sub>一</sub>以為<sub>中</sub>自家奥法<sub>上</sub>者可<sub>レ</sub>謂輕<sub>二</sub>蔑古徳<sub>一</sub>」(宇治恵心院結縁灌頂記)と難じたのが蓮体没後二年目の享保十三年であつた。淨厳蓮体流の結縁灌頂が辺土に普及しつゝあつたことを物語つている。(紙数の都合で註省略します)